

## 発達 1 (201~207)

座長 花沢成一・阿部明子

- 201 日本の児童の感情の研究 XI  
東京家政大学 阿部明子
- 202 母親の育児意識に関する一考察 その1
- 203 母親の育児意識に関する一考察 その2  
大阪成蹊女子短期大学①竹内和子  
〃 ②上原明子
- 204 育児における女性の意識  
——世代差からみた分析——  
お茶の水女子大学 秦野悦子
- 205 母性に関する発達の研究(5)  
——園児の母親においてみられるわが子への  
愛着と夫への愛着の関連性について——  
東京都立大学 大日向雅美
- 206 母性に関する発達の研究(6)  
——妊産婦における夫への愛着と児への愛着  
との関連性について——  
東京都立大学 雨宮幸恵
- 207 母性意識と母性感情の日伯比較  
——母性心理学研究Ⅻ——  
日本大学 花沢成一

確認や簡単な質問ははぶき、討論の概要を述べる。

202, 203: 岡(聖心女子大)より、質問項目の質の違いを確認していく必要性と、育児意識を構成している項目間の関係を明らかにし、プロフィールで捉える必要性はないか。また第一子群と第二子群の比較に於ては、子の成長に伴って母親のかかわり方が異なってくるので、幼児期のみでなく児童期まで考えなくてはならないとの意見が出された。若葉(東京学芸大)からは、吃音児の生育歴からみると、出産前の母の状態、発吃した時期の状況と関連があり、子どもとの情緒的な結びつきが重要視されるが、例えば、抱きしめる。共に遊ぶなどの項目をどう考えるかとの質問があり、花沢からは、母親の婚前の生活史も重視すべきだと指摘があった。これらに対し、各項目間の関係は結果として示されなかったこと、それは、母親の理念的な回答があるためと思われるので、現在、父親に対しての質問を考慮中であり、子ども自身が父母をどうとらえているかも調査中である。と説明があった。

204: 岡, 若葉, 大日向より、母集団についての説明を求めるとともに、母集団の条件が異なる場合、即世代

差を現わすのではなく、母集団差+世代差が示されるのであるとの意見が出され、Dがお茶の水女子大の教育学科の学生で、A, Bがその祖母と母であるならばC世代を卒業生とすればよいとの助言がなされた。3歳以下の第1子を育児中の母親を比較したくてCとしたので、選択方法は異なったが結果的には、学歴も大差なく、家庭環境としてはC, Dが同じ世代と考えてよいと思うと発表者の回答がなされた。

205, 206: 岡より、愛着行動を夫へのものも子へのものも共に、「……したい」という願望・要求で捉えているが、「愛してほしい」との要求の強さは実際に「愛されている」時と、「愛され方が不足」という非常に異なった愛着関係を含んでしまう。母性意識や育児態度を考える時、この願望のみで強さ弱さを決定し、同一母集団として処理するには大きな欠陥がありはしないか、また値の差は今後補っていかれるのかを問われた。これは、SCT形式の回答で、夫、子どもの存在を記述してもらった結果を照合して検討していくとのべられた。

207: 山口(岡山大) 大日向, 上原より、ブラジルの方が理想的にみえるが宗教の問題、ブラジルにおける子どもの自立や思春期の非行との関係、子どもの数、母性意識の肯定、否定の意味づけが質問された。これに対して、カソリック信者が多いので宗教的な基礎があることは確かであること。幼児期には密着した親子関係にあるが、経済的な問題もあって、自立も行われていくし、家庭内暴力などのじめじめした犯罪は少ないこと。家庭で夫婦が子どもを育てるのだという意識が強いことがのべられた。

全体的な問題として、小倉(早大)より、母性意識育児意識という場合の意識の定義が不明瞭であるように思うが、研究として有効であろうか、また、時代の文化的影響を画然と区別できる方法があるのだろうかとの質問がなされた。特に岡より、分析は複雑になるが、意識をとらえる時に、状況に即した行動、潜在的な意識、親の子に対する感情のみでなく、自分自身の充足感、価値観など構造的に考え、研究を行っている。また、世代差と加齢現象が混然となることは問題だが、時代の文化的影響を考える時、以前の同じような研究が同年齢を対象にある時その比較を行い、質問項目の不適當なものを分析する。あるいは、現時点で年配者に聞く時、その意識や態度の変化を示してもらって補うようにすることを工夫しなければならぬとの回答がなされた。

(阿部明子)